

サステナビリティという語の意味

公益財団法人 国際東アジア研究センター
所長 谷 村 秀 彦

サステナビリティという語は、一般に「持続可能性」と訳されている。この語は、sustain という動詞に「可能になる」という意味の語尾-able が付き、これがさらに名詞になっている語である。ここで注意しなければならないのは、sustain という動詞は直接目的語をとる他動詞であるということである。

さて、以前、ガバナビリティという語の意味が話題になったことを覚えている方はいるだろうか？この語は、govern という他動詞に語尾-able がつけられ、これが名詞になった語である。govern という他動詞は、主語が目的語を「取り仕切る」あるいは「支配する」という意味であり、-able という語尾が付くと、受動的に「取り仕切られ易さ」あるいは「支配され易さ」という意味になる。従って、我が国のガバナビリティが高いということは、我が国国民が政府によって「取り仕切られ易い」という意味であるという議論であった。

もう、お気づきと思うがサステナビリティという語も全く同じ構造を持っている。sustain という語は、主語が目的語を「保持する」という意味の他動詞であって、主語それ自体が「持続する」あるいは「継続する」という自動詞ではない。従って、この語に-able という語尾がつくと受動的に「保持され易さ」という意味になる。そこで、サステナブルな開発とは、「保持され易い開発」という意味であって、我が国におけるこの語の一般的理解である「それ自体として継続することが可能である開発」という意味にはならないと理解しなければならない。

ここで問題になるのは、sustain という語の主語として何が想定されているかである。この問いに対するヒントは新約聖書にある。この語は、ヘブライ人への手紙第1章にただ1回登場する。英語で引用すれば、

In times past, God spoke in partial and various ways to our ancestors through the prophets; in these last days, he spoke to us through a son, whom he made heir of all things and through whom he created the universe, ---who **sustains** all things by his mighty word.

（神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また御子によって世界を創造されました。――御子は万物をご自分の力ある言葉によって支えておられます。）

つまり、sustain の主語としては、言外に「神」が想定されているのである。ここからサステナブルな開発とは、神が支えることのできる開発という理解が生まれ、正義(justice)ある開発がサステナブルな開発であり、環境問題ばかりでなく、貧困撲滅や性差別の解消がサ

スティナブルな開発のための教育(ESD)のアジェンダとして登場するのである。

仏教の世界にもこれに近い意味で使われる「加持」という語がある。仏が大悲・大智によって衆生の願いに応じることを「加」といい、衆生がそれを受け入れることを「持」と解釈し、双方が相応一致したときに仏の力が発揮されて「加持」が実現するとされる。つまり、仏の力を十分に発揮させることのできる利他的な開発がサスティナブルな加持可能な開発であると理解できる。

リオ＋２０の会議においては、さらに「グリーン経済」ということばが採択された。ここでいう「グリーン」ということばは、ゲルマン神話に表れる「森の精霊」を想起させる。すべての生命の源泉としての超越的な存在が「森の精霊」である。我が国の農耕儀礼の中では、山の神・田の神として去来する神である「樹霊・穀霊」が登場し、生命の源としての山の神・田の神に持続的な豊作を祈願する祭りが行われる。この意味で、伝統的な我が国の稲作農業は、持続的なグリーン経済の典型例に他ならない。

サスティナビリティという語に宗教的な意味を持たせることに違和感をもつ向きもおられようが、グローバルに考えれば超自然的な神の存在を信じて生きている人々が圧倒的な多数派である。持続可能性を科学の世界で捉えるばかりでなく、精神の世界において考えることも必要なのではなかろうか。